

「おいしい」が聞きたくて

中部小・4 宮澤 環

給食のこん立てが配られると、何が出るかなあと、必ずチェックします。

「あつ、とりのからあげが出る。」

「ぎょうざの日もある。やったあ。」

自分の好きなメニューがあると、食べたくなって、学校に行くのも楽しみになります。

「げ、赤飯か。」

私は、苦手な食べ物が多いので、がっかりするときもあります。給食しだい、その日の日の気分が上がったり、下がったりします。だから、「給食室のいちにち」という本が気になり、読んでみることにしました。

本には、調理員さんの服そうや、使っている機械がくわしく、分かりやすく書いてありました。本を読んでいると、二年生の時に、見学に行った給食センターを思い出しました。その時は、スープを作っているなべやまぜるひしゃくの大きさにすぐびっくりしました。本を読み進めると、見たことがあるな、同じだなと思うこともあったけど、初めて知ったことがたくさんありました。たとえば、作ったものを、五十グラムずつ、れいとう庫にほぞんすることです。これは、食中どくをおこしたときに調べるために行っています。また、野菜は、三回も水を変えてしっかりと行っています。だから、私が一番好きないちごも、おいしく安全に食べられるんだなと思いました。

この本を書いた大塚菜生さんは、病院の給食室で働いたことがあって、そのけいけんを生かして書いたそうです。私のお母さんも、

前、病院でえいようしをしていました。入院している人の病気のていどにあわせて、味を変えたり、細かくきざんだりしていたそうです。

「一人ずつ味を変えるなんてすごいね。」
とお母さんに言うと、

「時間がかかって大変だったんだよ。」

と言っていました。大変なのになんでやるんだろうと思っていると、「かん者さんに安全においしく食べてほしいからね。」

と言って、笑っていました。本に出てくるえいようしの山川さんも、からっぽの食かんを見て、

「みんな、すごいすごい。おいしく食べてくれたんだな。」

と言って、にっこりしていました。そういえば、ばあばの家でごはんを食べたときも、同じようなことがありました。ばあばは、ずっと立ったまま天ぷらをあげたり、ごはんのじゅんびをしたりしていました。私が、

「ばあばの作った天ぷら、サクサクでおいしい。」

と言うと、ばあばはすぐうれしそうでした。

給食の調理員さんも、お母さんも、ばあばも、食べる人の「おいしい」が聞きたくてがんばっているんだと思いました。だから、私は、ごはんを作ってくれる人に「おいしい」としっかりと行って、笑顔でごはんを食べようと思います。